

青春本棚通信

第38号



11月に実施した中央図書館の特集展示

LINEUP

◆ 特集 ◆

第12回



『松山市立中央図書館ビブリオバトル』大紹介

- ◆ 青春ひとことLINE～図書館の人にきいてみた～
- ◆ 本好きのコーヒーブレイク～寒い冬に泣ける本～
- ◆ 図書館ダンジョン・エクスプローラー～秘蔵図書探索～
- ◆ 図書館投稿のススメ～青春本棚で投稿を紹介してみよう～

◆特集◆

第12回『松山市立中央図書館ビブリオバトル』

9月21日(日)、今年も中高生によるビブリオバトルを開催しました。今年は7月に『こども本の森 松山』がオープンしたことを記念し、会場を坂の上の雲ミュージアムに移して実施しました。2部制で行われた今年のビブリオバトル。チャンプ本に選ばれた2冊を始め、各バトラーにそれぞれの推し本への熱い思いをコメントに書いていただきましたので、皆さんにご紹介します。あなたはどの本を読みたくなりますか？



日浦中学校3年生
高野 葉月

読んだら絶対
異世界に迷いこんでしまう本
『はてしない物語』
(ミヒヤエル・エンデ//著)



新田高等学校2年生
徳永 棕太

読んだら絶対
人と相談したくなる本
『信仰』
(村田 沙耶香//著)

美しい。誰もが表紙を見た瞬間、そう思ってしまうでしょう。そんな魅力をはらんだ本。それが、「はてしない物語」です。表紙や印刷された文章の色、何から何までが大事な意味を持ち、たちまち夢中になって読んでしまうこと、うけあいでです。

主人公はバスチアンという、さえないが、想像力に富み、物語を作る才のある少年。バスチアンは、「はてしない物語」という本を読み進め…と物語は進んでいきます。

この本はファンタジーで、もともと児童文学として書かれた作品です。しかし、大人でも、いや、だからこそ読む価値があります。この物語には哲学の視点があり、「友情の美しさ」や「生きることへの悦び」、「人を愛することへの悦び」など様々なことを、現代社会に生きる私達に教えてくれます。そして、子供の頃読んだときと、大人になって読んだときとでは、感じ方が変わってきます。まさに、大人から子供まで、現代社会を生きる多くの人々が読むべき一冊です、ぜひ読んでみてください。

ちなみに同じ作者の本で、「時間とは何か」をテーマにした「モモ」という作品も非常におもしろいです。ぜひこれも読んでみてください。

この本は「コンビニ人間」で芥川賞を受賞された村田沙耶香さんが手掛けた11篇の短編からなる短編集となっています。題名が『信仰』の通り収録されている短編は、基本的に信じることの「危うさ、切実さ、せつなさ」などの信じるとはどういう事なのかを深く追求した作品となっています。

表題作である「信仰」は、人が一つのものを信じすぎるとどうなるのか、ということが詳しく美しい物語となってえがかれてています。かなり考えさせられる本であり、私は一回読んだだけじゃ理解できませんでした。みなさんも何回もくり返し読んで「信じるとはどういうことか」をその目で確かめてみてください。

第12回『松山立中央図書館ビブリオバトル』紹介本

今回発表したバトラーの推し本を紹介します。まずは、第1部から。

中学生から高校1年生が発表しました。ベストセラーも含まれているので、知っている作品もあるのでは？

済美平成中等教育学校4年生

明照 悠吾



読んだら絶対
読書が好きになる本

『コンビニ人間』

(村田沙耶香//著)

「コンビニ」、「人間」と聞いてみなさんはどうなことを思ひ浮かべますか？この本の主題は、「普通とは何か？」です。普通を題材にした作品のほとんどが、みんなの違う普通を受け入れて認め合いながら生きていこうという感動話ではありませんか？コンビニ人間はそんな薄っぺらい作品ではありません。

この本の主人公「古倉恵子」は現在36歳。大学卒業後18年間ずっと就職もせずコンビニのアルバイトだけをしてきました。古倉さんは昔から白い目で見られるような特殊な人物でした。しかし、読み進めていくうちに特殊だと思っていた古倉さんに共感できるようになります。冗談だと思うかもしれないが本当に共感できます。

この本を読むまで、「普通」とは共有された価値観だと思っていたました。しかし、古倉さんの視点を知り、考えたことで自分の「普通」はとても危ういものだと気づかされました。多様性が叫ばれるなかでも今の生活に不満を持っているなら、新しい視点が得られる刺激的な一冊です、是非一度読んでみてください。

愛媛大学附属高等学校1年生

山口 真奈



読んだら絶対
新しいピアノの姿が見られる本

『羊と鋼の森』

(宮下奈都//著)

私はこの本を読んだときにこの本のタイトルが何を表しているかというのを最初分かりませんでした。しかし何回か読むうちに気づきました。これはピアノを表しているのだなと。羊はピアノのハンマーのフェルト部分。鋼はピアノの弦の部分。森は木が集まってできているので木と仮定するとピアノはいたるところに木がつかわれているのでピアノ全体のすべてを組み合おせると見事にピアノを表しています。ですがどうして作者は木とかかず森としたのでしょうか。それはこの作品を読み進むと分かることと思います。森というものは暗くすこしげめっとしていてとても快適といえる場所ではありません。一度森にまよいこむと二度と出でられないという言葉は小説の常套句であります。あなたも一度はそんな経験をしてことがあるのではないでしょうか。この本はそんな迷いをかかえている人にこそ読んでほしい本です。答えはでなくとも少しでもその迷いを解消するような解決法をこの本が伝えてくれるかもしれません。ぜひ読んでみてください。

愛媛県立伊予高等学校1年生

愛媛県立松山西中等教育学校2年生

愛媛県立松山西中等教育学校2年生

平岡 春晴

読んだら絶対
また読み返したくなる本

『ちいさなちいさな王様』

(アクセル・ハッケ//著)



あるサラリーマンの前に歳を取るほど小さくなるという特徴を持つ小さな王様が現れます。それぞれ、サラリーマンと王様の世界の常識を語り合い、お互いの世界の違いについて知っていくという話です。僕がこの本が好きな理由が2つあります。

1つ目は世界観です。文章を書いたアクセル・ハッケさんと、本の内容にピッタリの絵を描いたミヒヤエル・ゾーヴァさんが生み出す唯一無二のストーリーがとても好きだからです。

2つめは、余韻です。この話はとてもリアルで、自分もこの本の世界にいろいろに感じ、読み終わったあとでも、その本の余韻にひたれます。僕はまた、その本の余韻にひたりたくて何度も読んでいます。この本は想像で描いた本なので読みだけでも想像の世界に入ることができます。普段想像することが少ない人や、子供の心を忘れかけている人におすすめです。

この本の大好きなテーマは生きることと死ぬことです。私たちは普段、生きることと死ぬことは真逆のことだと思いがちです。僕もそう思っていました。ですが本当は違います。人間、本当は死から逃げたりために生きているのではなく、死に向かって生きています。それは、恐ろしいことではありません。そこからいなくなる、そして、別の世界に移動するということです。普段そのことを意識していない、でも、王様とサラリーマンとの会話で、それに気づく瞬間があります。この本を読んで、生と死は陸つきになっている、命の終わりは永遠のはじまりだということを知りたいです。

僕はこの本を読んでからグミベアを家に置くようにしています。あなたも読んでみるとその理由がわかると思います。

濱名 史歩



読んだら絶対
芸人について興味が湧く本

『火花』

(又吉直樹//著)

大澤 俐乃



読んだら絶対
兄弟を大事に出来る本

『朝と新』

(いとうみく//著)

この本はどの年代の人が見ても面白く感じるとは思いますが、やはり中高生の人達に特におすすめできる本です。「夢を追い続ける」ということは高校・大学受験を控えろ私たちにとってとても関係の深いものになると思っています。

また、ビブリオバトルの際、印象に残った場面を二つ程あげさせてもらいましたがその他にも神谷の豊胸手術や生き方などの興味深い場面がたくさんあるのでぜひこの本を手に取っていただけると嬉しいです。

「朝と新」というのは、2人の兄弟の名前です。これは、高速バスの事故に巻き込まれて失明した兄・朝とそのバスに乗り原因を作ってしまった弟・新の物語です。ある日、盲学校に通っていた朝が、1年ぶりに家に帰ってくるところから物語はスタートします。2人は、朝の提案で新を伴走者に「グラインドマラソン」を始めました。グラインドマラソンというのは、素紙を見て分かることおり、障害者が伴走者という人にリードしてもらって走るマラソンのことです。50cmほどの縄を持って走ります。2人がすれ違っていた心を、グラインドマラソンで再び通わせるところが見どころです。めちゃくちゃ感動で生きる兄弟愛の物語なので、ぜひ読んでみてください。

第2部は高校2、3年生です。今回紹介された本はすべて松山市立図書館で借りられます。しかし!! 『一次元の挿し木』は予約殺到中につき、順番待ちがえらいことになっています。(m^-・ω・-) m ゴメン…

松山学院高等学校2年生

福島 歩



読んだら絶対
のめり込んでしまう本
『一次元の挿し木』
(松下 龍之介//著)

この本はとにかく不可解な謎からはじまっています。設定はとても現実的で、ファンタジーのような現実に存在し得ない内容が盛り込まれているとは思えないのに、200年前の人骨と失踪中の姫妹のDNAが完全一致するという、どう考えてもあり得ない謎を提示されなんです。現実的な謎解きじゃない謎の分からぬ話が展開されていくのかと、この本のミステリー要素に不安を抱きながらも、人骨という怪しげな魅力に惹かれて、僕はこの本を読み始めました。結論、この本の結末に納得のいかない点は一切ありませんでした。しっかりと現実的な世界観を保った真実が提示されたんですね。とても満足のいくラストでした。さらに、そこに行きつくまでの過程も素晴らしいものでした。とにかく情報の出しあ、見せ方が上手いんです。そんな所もこの本の魅力かなと思います。

ミステリーですので内容について詳しくは語れませんが、間違いなく読みだしたら止まらない、読んで満足のいく本だと思います。

新田高等学校2年生

花崎 来未



読んだら絶対
小説を書かずにはいられない本
『僕は小説が書けない』
(中村 航・中田 永一//著)

本好きのあるあるのひとつとして挙げられる、「自分も小説などを創作したが、途中で挫折して黒歴史になる」という経験。それを経験しているのがこの主人公・光太郎です。高校に入ったばかりの光太郎は半ば強制的に文芸部に入ったことにより小説を再び書くことになります。そこから執筆に恋に、と本好きの理想のような青春をおくる物語です。

高校生の私から見てもリアルな思春期の描写はもちろん、文芸部のOBの先輩二人の対極的な生き方を、小説を書いていた人たちが大人になったらどうなるのか、という観点で「読んでみるのもポイントです。

小説を書いたことがある人もない人も楽しめる本です。読んだ後には思わず筆を手にとって小説を書きたくなってしまう、そんな本好きのための青春物語『僕は小説が書けない』を是非ご一読ください。

鹿島朝日高等学校3年生

喜田 亜佳莉



読んだら絶対
感情の渦に圧倒される本
『盲目的な恋と友情』
(辻村 深月//著)

辻村深月さんと言えば「冷たい校舎の時は止まる」や「かがみの孤城」など、緻密でリアルな心理描写と極めて美しいトリックで多くのファンを虜にしてきた。この作品も例外ではなく、語り手2人の狂気的な「好き」の暴走、そしてある事件の真相が293ページの中でコンパクトに収まっている。

発表では伝えきることができなかつたが、私は特に後半・友情パートの語り手である留利絵のキャラクターが好きだ。彼女は家庭環境や幼少期の体験から、起きたことを自分の都合のいいように解釈し、自分自身に嘘を重ねる癖がある。友達のどちらかとした恋愛話をただ聞いただけで経験したような錯覚をもつ、そんな人間だ。それなのに、彼女は自分の認識が歪んでいるという自覚はない。盲目的な2人の運命の行く先を、是非見届けてほしい。

新田高等学校3年生

森 春華



読んだら絶対
本に心があると思うようになる本
『本を守ろうとする猫の話』
(夏川 草介//著)

序盤の「猫が答えた。間違なく猫が『猫で悪い』か『いい』と答えた。」という主人公の林太郎の台詞で面白い本だと確信しました。正に「本の虫」という言葉がぴったりの氣弱で引きこもりだけど本を心から愛している林太郎の成長にも注目して読んでみて下さい。時々回想で出て来る林太郎の祖父も本を大切にしていく、実は数百年くらい生きた仙人であることを疑うくらい言葉の1つ1つが素敵です。

迷宮では「言葉で戦っている」感じがして、相手のどこか違和感のある言葉に対し、林太郎の芯のある心のこもった言葉をぶつける様子は爽快です。文章のあちこちには世界の古くからの名作のオマージュも含まれているそうです。2巻まで読むとより感動するので、ぜひ2冊とも読んでみて欲しいです！

愛媛大学附属高等学校2年生

清水 ひまり



読んだら絶対
読書感想文を書きたくなる本
『スガリさんの感想文はいつだって斜め上』
(平田 駒//著)

この本は、学校にスガリ(蜂の幼虫)を持ってきて、それを食べる変わり者・スガリさんこと須賀田綴が、弱虫家庭教師・直山杏介を巻き込んで『読書感想部』を立ち上げていくお話です。

「読書感想文か…」と思った、そのあなた!!ぜひ読んでみてください!!この本を読めば、読書感想文に対する考え方が変わります!(私の実体験です!!)とにかくスガリさんの感想文がすばいいんです!みなさんには読書感想文の出しはどんな風に書きますか?普通なら本の紹介なんかをしますよね。しかし!!スガリさんは違うんです!!スガリさんの夏目漱石『こころ』の読書感想文の最初の一文がこちら。“死の直前、『何はなぜ、開いた裸を閉めなかつたのでしょうか?』まさに『斜め上』の出だしですよね!このようなスガリさんワールドがおもしろいだけではなく、はっとさせられる、そんな感想文なんです!ぜひ読んでみてください!!